

中古日本語におけるテハベリキ形

山 本 博 子

“tehaberiki” form in Classical Japanese

Hiroko YAMAMOTO

本稿は、中古日本語におけるテハベリキ形について、タリキ形・キ形との用法の違いを概観したものである。

そのために、まず、先行研究を検討しながら、テハベリキ形がどのような意味を表す可能性があるのかを考察した。

次に、メノマエ性・人称・動詞の観点から、テハベリキ形・タリキ形・キ形の用例をそれぞれ分類し、用例数の分布状況を明らかにした。その結果、メノマエ性・人称については、用例数の分布状況においてテハベリキ形とキ形との間に類似性を認めることができた。しかし、実際の用例を検討してみると、テハベリキ形には、タリキ形を丁寧語化したと考えられる例があることを指摘した。動詞の分布状況については、テハベリキ形・タリキ形・キ形の間に大きな違いを認めることはできなかった。しかし、存在を表す動詞はキ形にしかなく、特徴を表す動詞はテハベリキ形・タリキ形にしかないという違いがあることを指摘した。

はじめに

本稿は、中古日本語におけるテハベリキ形について、タリキ形・キ形との用法の違いを概観するものである。¹

そのために、まず、テハベリキ形がどのような意味を表す可能性があるのかを考えてみたい。次に、メノマエ性・人称・動詞の観点から、テハベリキ形・タリキ形・キ形の用例をそれぞれ分類し、用例数の分布状況を明らかにする。個々の用例の詳細な検討については、稿を改めたい。

テハベリキ形についての先行研究は管見のかぎり見られない。しかし、「てはべり」については、近藤泰弘（2000）の「5・2 敬語のアスペクト的性格」において興味深い考察が見られる。まず、近藤泰弘（2000）は、「はべり」の問題点を以下のように指摘する。

「はべり」は、本動詞としては「あり」の丁寧語であり、存在の意味を表すことは明らかであるが、補助動詞としては必ずしもそうではなく、単なる丁寧を示すものである場合

もあるとされている。だとすると、補助動詞「はべり」の持つアスペクトは、ある場合には、「あり」と同様な状態性であり、ある場合にはそうでない（アスペクト的には中性であって、直前の動詞のアスペクトが述語全体のアスペクトになる）というように異なった振舞いをするはずである。 (P171)

そして、『はべり』の持つアスペクト的性格の二重性が、実際に観察されるかどうか、またどのような文型においてそれぞれの性格が現れるか」という問題について、『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『源氏物語』を資料として検証していく。その結果、「動詞連用形+て+はべり」について、『り』『たり』の場合には、まず、『り+はべり』あるいは『たり+はべり』の形は存在しない。同様に『はべれ+り』や『はべり+たり』も丁寧語の『はべり』には存在しない」とことや、『てはべり』という接続には、『ぬ』は決して単独で接続することなく、その点で全体としては状態性のアスペクトを示すものである」ことから、『てはべり』（の少なくともほとんどの部分）は『り』または『たり』の丁寧語化したものであると考えるしかない」と結論づける。例として「なんじがもちて侍るかくや姫、たてまつれ。(竹取)」などをあげ、これは「持ちたるかくや姫」が丁寧語化したものであろうと指摘している。このような近藤泰弘(2000)の見解をもとに中古語の複合過去形式に目を向けると、テハベリキ形がタリキ形の丁寧語化したものであるという仮説を立てることが可能になるであろう。

しかし、その一方で、『日本国語大辞典 第二版』には、補助動詞として用いる「はべり」について以下のような説明が見られる。

動詞の連用形（または、それに助詞「て」の付いたもの）に付いて、その動作の存続を表わす「(て) あり」の意を丁重に表現したり、また、単にその動作を丁重に表現したりする。…ております。…ます。多く、自己または自己側の動作を表わす動詞に付いて、へりくだる気持がこめられるが、一般的に第三者の動作に用いることもあり、この場合は丁寧語ともされる。

つまり、「てはべり」は、動作の存続というアスペクト的意味を持ちつつ丁寧語化する場合もあるが、特にアスペクト的意味を持たず、単に動作を丁寧に表現するためだけに用いられる場合もあるとしているのである。この説明をもとに考えると、テハベリキ形が、単に過去の動作つまりキ形で表される動作²を丁寧語化したものであるという仮説を立てることも可能になる。

実際、テハベリキ形の用例を見てみると、タリキ形と同じような意味用法ではないかと考えられるもの（用例②）と、キ形と同じような意味用法ではないかと考えられるもの（用例④）の両方が存在する。³

- ①……大將は、「かのありし夜目にもしるく、用意・有様、氣高う心苦しき所などは、こよなく劣り給へりしものを。……」と、思え給ふ。 (狹衣物語)

②中納言、「一日見給へしかば、これにまさりてこそ侍りしか」などのたまふ。

(宇津保物語)

①のタリキ形の用例は、狭衣が「あの夜にもはっきりわかったが、女三宮は心遣い・様子などが女二宮より劣っていた。」などと思っている場面である。「劣り給へりしものを」は、過去において話し手が目撃した三人称の状態を表している。②のテハベリキ形の用例は、仲忠が「藤壺の筆跡を先日見たところ、この仁寿殿の女御の筆跡よりまさっていた。」などと言っている場面である。この「まさりてこそ侍りしか」は、①のタリキ形で表される意味と同じように、過去において話し手が目撃した状態を表していると言える。また、人の状態について述べた例ではないものの、一人称や二人称の状態を表した例でないことから、①と同様に三人称の例として扱うことができるだろう。

③大将、「日ごろ内裏に候ひ侍りて、夜昼御書仕うまつり侍りて、一日なむまかで侍りし。
……」。

(宇津保物語)

④親王、「一日、参りて侍りき。殊なることもおはしまさざりき。……」。(宇津保物語)

③のキ形の用例は、数日間の進講を終えた仲忠が、父兼雅にその報告をしている場面である。「まかで侍りし」は、過去における一人称の移動動作を表している。④のテハベリキ形の用例は、兵部卿の親王が、母の体調を案じている姉大宮に「先日、母のもとに参りました。特に変わった様子もなかったですよ。」などと報告している場面である。「参りて侍りき」は、③と同様、過去における一人称の移動動作を表している。

以下、メノマエ性・人称・動詞の観点から、テハベリキ形とタリキ形・テハベリキ形とキ形の共通点・相違点を明らかにしていきたい。

1、メノマエ性

メノマエ性とは、松本泰丈(1993a)が、「基本的に、はなしてが自分でみていることをのべるにかかわっている。」とし、「テンスやアスペクトが、デキゴトをなりたたせる舞台の時間的なしくみをうけもつカテゴリーであるのに対して、メノマエ性は、直接には、時間表現にかかわる以上に、空間表現にこだわるカテゴリーだといえそうである。」と説明している文法概念である。山本博子(2004)では、前掲した①のような例を示し、タリキ形には過去におけるメノマエ性を表す例が多いことを明らかにした。一方、キ形については、過去におけるメノマエ性を問題にしない形式であることを指摘した。

以下に、テハベリキ形・タリキ形・キ形のメノマエ性の有無についての用例数の分布状況を示す。なお、キ形のみに見られる「あり」「侍り」等の存在を表す動詞については、他の動詞と性質が異なるものと考えることから、分類対象からはずしている。

〈表1〉

形式 \ メノマエ性	あり	なし	合計
テハベリキ形	5 (20%)	20 (80%)	25 (100%)
タリキ形	56 (78%)	16 (22%)	72 (100%)
キ形	6 (1%)	452 (99%)	458 (100%)

〈表1〉を見ると、テハベリキ形とタリキ形は、ほぼ対照的な分布状況を示していることがわかる。それに対し、テハベリキ形とキ形は、類似した分布状況を示していることが確認できる。

しかし、実際の用例を検討すると、テハベリキ形の表すメノマエ性と、キ形の表すメノマエ性には、その具体性において違いが見られる。テハベリキ形の表すメノマエ性は、②で示した例に代表されるように、一回的で特定の時間に結びつけることのできる具体的な運動や状態に関わるものである。これは、タリキ形の表すメノマエ性と共通する点である。それに対し、キ形の表すメノマエ性には、以下の用例のように、一回的・具体的な運動というよりは、過去においてくりかえされた抽象的な運動に関わるものが見られるのである。

⑤大将、聞き給ひて、「このことにより、頭を、えさし出でで、朱雀院、ひがひがしきやうに思されき。……」とて、内裏へ急ぎ参り給ひぬ。 (宇津保物語)

このキ形の例は、若宮立坊の知らせを聞いた仲忠が、「立太子の問題のために院に参内できなかったので、朱雀院はご不満に思われていた。」などと思って急いで参内する場面である。これより前の場面において、朱雀院と仲忠が対面した際、気軽に参内して来ない仲忠に朱雀院がその訳を問う様子が描かれている。したがって、この「思されき」は、一見、過去において仲忠が目にした朱雀院の一回的・具体的な運動を表しているように解釈できる。しかし、仲忠は若宮立坊が決定するまでのある一定の期間朱雀院のもとに参内しなかったのであるから、この「思されき」は、朱雀院の一回的な運動というよりは、くりかえされた運動を問題にしていると考えることができるのである。

以上、メノマエ性の観点から検討した結果、用例数の分布状況においては、テハベリキ形とキ形との間に類似性を認めることができた。しかし、実際の用例を見てみると、テハベリキ形が、一回的で具体的な運動や状態を表す点において、キ形よりもむしろタリキ形と似た意味を表すのではないかと考えられた。

2、人称

ここでは、人称についての用例数の分布状況を示す。ただし、キ形のみに見られる存在を表す動詞については、人称を確定することが困難な例があるため、分類対象からはずしている。

〈表2〉

形式 \ 人称	一人称	二人称	三人称	合計
テハベリキ形	18 (72%)	1 (4%)	6 (24%)	25 (100%)
タリキ形	11 (15%)	4 (6%)	57 (79%)	72 (100%)
キ形	265 (58%)	32 (7%)	161 (35%)	458 (100%)

〈表2〉を見ると、タリキ形は一人称よりも三人称の方が多く、テハベリキ形とキ形は三人称よりも一人称の方が多いという分布状況の違いが確認できる。松本泰丈(1993b)は、メノマエ性は一人称では現れにくいと指摘している。確かに、話し手の運動や状態を話し手自身がメノマエにし、それについて述べるという状況は考えにくい。このようなことから、メノマエ性を表す例の多いタリキ形に、一人称の例が少なく三人称の例が多いのは当然の結果と言えよう。また、メノマエ性を表す例の少ないキ形に、一人称の例が多く見られることも納得のいく結果である。

一方、テハベリキ形については、「はべり」が用いられているため、第三者の運動や状態を表す例よりも、自らの行為をへりくだって述べる例、つまり一人称の運動を表す例が多いのだと考えられる。むしろ、それにもかかわらず、テハベリキ形に三人称の例が6例見られることから、テハベリキ形にキ形を丁寧語化する以外の意味用法がある可能性を見出すことができるのである。実際、テハベリキ形の三人称の例には、前掲した用例②以外にも、以下の例のように、タリキ形でも表すことができそうな、つまりタリキ形を丁寧語化したと考えられるようなものが存在するのである。

⑥「唐猫の、ここのに違へる様してなむ侍りし。……」など、(源氏物語)

このテハベリキ形の例は、柏木が、女三の宮の猫について「唐猫で、こちらのとは違った姿をしていました。」などと東宮に語っている場面である。「(ここのに違へる様)してなむ侍りし」は、過去の特定の時間に柏木が目撃した猫の様子を問題にしており、過去におけるメノマエ性を表していると言える。

なお、二人称については、テハベリキ形・タリキ形・キ形ともに用例数が非常に少ない。二人称において、テハベリキ形・タリキ形・キ形の間に意味の違いが認められるのかについては、稿を改めて検討したい。

3、動詞

テハベリキ形・タリキ形・キ形の動詞の分布状況を探るために、動詞を以下のA類からH類に意味分類した。この動詞の分類は、大枠において鈴木泰(1999)に従っている。

【動詞の意味分類】

- A 主体動作客体変化動詞（例：破る、置く、あく、渡す、やる、賜ふ、奉る、返す）
 B 主体（＝人）動作動詞（例：弾く、遊ぶ、言ふ、聞ゆ、聞く、承る、書く）
 C 主体変化動詞（例：なる、死ぬ、なくなる、生まる、減ぶ、やむ）
 D 主体（＝人）動作主体変化動詞（例：参る、まかる、来、帰る、とまる、臥す）
 E 主体（＝物）動作動詞（例：吹く、降る、涙落とす、笑ふ）
 F かかわり動詞（例：思ふ、知る、おぼす、見る、仕うまつる）
 G 動作相動詞（例：～初む、～果つ、す、しなす）
 H 状態動詞（例：あり、侍り、似る、劣る）

A類の動詞は、客体（物や人）に変化をもたらす人の動作を表すものである。B類の動詞は、単に人の動作を表すものである。楽器の演奏など、物を用いる動作を表す動詞を含むが、これらは、A類の動詞と異なり、物の変化をもたらす動作を表してはいない。C類の動詞は、人や物、出来事の無意志的な変化を表すものである。D類の動詞は、自らの動作によってもたらされた、人の変化を表すものである。E類の動詞は、物の動きや現象、または人の無意志的な動作を表すものである。F類の動詞は、人や物事に対する、人の心理的な関わり方や態度を表すものである。G類の動詞は、動詞自体が、運動の始発や終結、完成や継続などの局面を表すものである。H類の動詞は、A類からG類までの動詞とは異なり、運動を表さない動詞である。存在を表す「あり」「侍り」や人の特徴を表す「似る」「劣る」は、時間的展開性がないものである。したがって、アスペクト対立が成立しない。現代語の例では、「ある」はシテイル形で表されることがなく、「存在する／存在している、違う／違っている」は、スル形でもシテイル形でも表されるものの、アスペクトの意味の対立を示しているわけではない。

以上の分類に、テハベリキ形・タリキ形・キ形がそれぞれ何例ずつあるのかを示したものが、以下の〈表3〉である。

〈表3〉

形式 \ 分類	A	B	C	D	E	F	G	H	合計
テハベリキ形	4 (16%)	6 (24%)	0 (0%)	10 (40%)	0 (0%)	1 (4%)	3 (12%)	1 (4%)	25 (100%)
タリキ形	9 (13%)	9 (13%)	2 (3%)	19 (26%)	0 (0%)	24 (33%)	6 (8%)	3 (4%)	72 (100%)
キ形	21 (4%)	203 (39%)	12 (2%)	19 (4%)	7 (1%)	106 (20%)	34 (6%)	124 (24%)	526 (100%)

上の表を見る限りでは、テハベリキ形・タリキ形・キ形の動詞の分布状況に大きな違いを

認めることはできない。テハベリキ形には、「参る」等の移動動詞が多いため、D類の動詞が半数近く見られる。タリキ形には、「思ふ」「思す」等の思考動詞が多いため、F類の動詞が比較的まとまって見られる。キ形には、「聞ゆ」「のたまふ」「聞く」「見る」等通達活動や感性的認識活動に関わる動詞が多いため、B類の動詞が比較的多く見られるのである。

なお、H類の動詞については、キ形に68例見られる「あり」「侍り」等の存在を表す動詞が、テハベリキ形・タリキ形には一例も見られないという違いがある。これは、「はべり」は「あり」の丁寧語であり、「たり」「り」は「あり」から発生したものだという歴史的な背景を考えれば、当然のことだとも言えよう。しかし、このような事実からも、テハベリキ形が単にキ形を丁寧語化したものではなく、キ形とは異なる固有のアスペクト的意味を持つことが推測できるのである。さらに、H類の動詞については、テハベリキ形・タリキ形に認められる「劣る」「まさる」等の人や物の特徴を表す動詞が、キ形には一例も認められないという違いも見られる。

おわりに

以上、本稿では、テハベリキ形とタリキ形・キ形との用法の違いを概観した。

その結果、メノマエ性については、用例数の分布状況においてテハベリキ形とキ形との間に類似性を認めることができた。しかし、実際の用例からは、一回的で特定の時間に結びつけることのできる具体的な運動や状態を問題にしている点で、テハベリキ形とタリキ形との間に共通点を見出すことができた。人称については、タリキ形は一人称よりも三人称の例が多く、テハベリキ形とキ形は三人称よりも一人称の例が多いという分布状況の違いがあることを示した。しかし、テハベリキ形の三人称の例を見ると、タリキ形を丁寧語化していると考えられる例があることを指摘した。動詞の分布状況については、テハベリキ形・タリキ形・キ形の間に大きな違いを認めることはできなかった。しかし、「あり」「侍り」等の存在を表す動詞はキ形にしかなく、「劣る」「まさる」等の特徴を表す動詞はテハベリキ形・タリキ形にしかないという違いが見られることを指摘した。

注

- 1 本稿では、助動詞とその複合形式を動詞の語形とすることから、これらをキ形、タリキ形、テハベリキ形などと称する。なお、リキ形をタリキ形と区別せずに扱い、本稿の中では便宜上一括してタリキ形と称する。リキ形とタリキ形は、接続する動詞の活用が異なるだけで意味の違いはないと考えるからである。
- 2 キ形の表す意味については、山本博子（2000、2002、2003、2004）を参照されたい。
- 3 資料として、『宇津保物語』（テキスト：室城秀之校注・おうふう）、『落窪物語』（テキスト：日

本古典文学全集 小学館)、『源氏物語』(テキスト:玉上琢彌訳注・角川書店 全十巻)、『狭衣物語』(テキスト:日本古典文学大系 岩波書店)を用いる。検討対象とする用例は、会話文(心中詞も含める)の終止用法に限る。解釈については、テキスト以外の注釈書も随時参照している。

- 4 本稿では、③の用例「まかで侍りし」のような「動詞+はべり+き」については、「動詞+き」を単に丁寧語化したもので、アスペクト的にはキ形と同じ意味を表すものとする。これは、「動詞連用形+はべり」について、「動作を示す非敬語形が単に丁寧語化することで『はべり』が付加されたもの」とし、この場合の「はべり」には状態性のアスペクトは存在せず「アスペクト的に中性である」と指摘する近藤泰弘(2000)の考察に従うものである。しかし、「動詞+はべり+き」を、本当に「動詞+き」を丁寧語化したものとみなしてよいのかという点については、今後改めて検討する必要があると考えている。

【主要参考文献】

- 近藤泰弘(1992)「丁寧語のアスペクト的性格—中古語の「はべり」を中心に—」
(『辻村敏樹教授古稀記念 日本語の諸問題』明治書院)
- (2000)『日本語記述文法の理論』(ひつじ書房)
- 鈴木 泰(1995)「メノマエ性と視点(Ⅰ)」
—移動動詞の～タリ・リ形と～ツ形、～ヌ形のちがい—
(『築島裕博士古稀記念 国語学論集』汲古書院)
- (1996a)「メノマエ性と視点(Ⅱ)—移動動詞の基本形を中心に—」
(『山口明穂教授還暦記念 国語学論集』明治書院)
- (1996b)「メノマエ性と視点(Ⅲ)—古代日本語の通達動詞のevidentiality(証拠性)—」
(『日本語文法の諸問題—高橋太郎先生古希記念論文集—』ひつじ書房)
- (1999)『改訂版 古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』
(ひつじ書房)
- 松本泰丈(1993a)「くメノマエ性」をめぐって—しるしづけのうつりかわり—
(『国文学 解釈と鑑賞』58-7)
- (1993b)「くシテアル」形おぼえがき—奄美喜界島(大朝戸)方言から—
(松村明先生喜寿記念会編『国語研究』明治書院)
- (1996)「奄美大島方言のメノマエ性—龍郷町瀬留—」
(『日本語文法の諸問題—高橋太郎先生古希記念論文集—』ひつじ書房)
- 山本博子(2000)「中古語におけるキ形とニキ形・テキ形の違い」
(お茶の水女子大学国語国文学会『国文』93)
- (2002)「中古語におけるキ形とニキ形・テキ形のアスペクト的意味の違い」
(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究年報』25)
- (2003)「中古語におけるキ形とタリキ形の違い」
(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究年報』26)
- (2004)「中古語におけるタリキ形の意味—キ形との比較を通して—」
(東京大学国語国文学会『国語と国文学』81-4)
- (2005)「中古日本語における複合形式についての学説史」
(『千葉敬愛短期大学紀要』27)